

第 4 章

地域のかかわり

酒井 厚



第 1 章

第 2 章

第 3 章

第 4 章

第 5 章

第 6 章

資料編

定期的な託児の状況

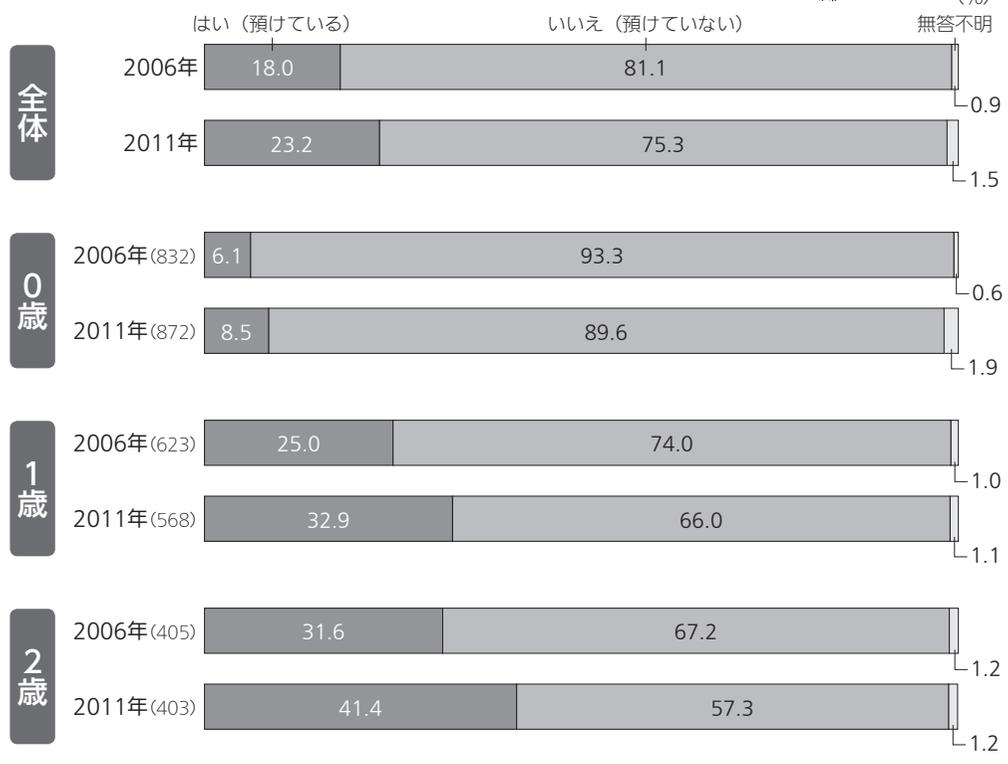
2006年と比べ、2011年では、保育所への託児率が上昇し、施設職員との信頼関係に対する評価も高まっている。そして、施設職員から信頼されていると思えることが、親の子育て意識を健全に保つ要因の1つとなっている。

託児の利用者数の推移と託児先

図4-1-1は、育児期の妻に、調査時点における託児施設や保育サービス、祖父母の家などへの定期的な託児の有無をたずね、その回答を集計したものである。全体集計をみると、2006年（18.0%）に比べて2011年（23.2%）は5.2ポイント上昇していることがわかる。子どもの年齢ごとの集計では、1歳と2歳で顕著な差がみられ、1歳では7.9ポイント、2歳では9.8ポイント上昇していた。

子どもの預け先については、育児期の妻に16の場所・サービスからあてはまるものをすべて選んでもらった。表4-1-1は、回答結果を調査年ごとに集計したものである。全体集計の結果から、2006年と2011年に共通して、利用者数をもっとも多いのは「公立認可保育所」であり、2番目が「私立認可保育所」、3番目が「祖父母の家」であった。また、子どもの年齢による内訳では、両年に共通して0歳時点では祖父母の家を利用する割合が13項目のなかでもっとも多いという特徴がみられた。

図4-1-1 定期的な託児の有無（経年比較 全体・子どもの年齢別） (%)



注1) 「現在、託児施設や保育サービスなどに定期的に〇〇ちゃんを預けていらっしゃいますか」とたずねた設問に対する回答。
 注2) () 内はサンプル数。

表4-1-1 託児先の種類と該当者の割合（経年比較 全体・子どもの年齢別） (%)

	2006年				2011年			
	全体 (335)	0歳 (51)	1歳 (156)	2歳 (128)	全体 (428)	0歳 (74)	1歳 (187)	2歳 (167)
公立認可保育所	34.6	25.5	41.7	29.7	32.9	10.8	36.4	38.9
私立認可保育所	29.3	23.5	27.6	33.6	26.9	20.3	28.9	27.5
企業内・病院内保育所	3.9	3.9	5.8	1.6	6.5	8.1	5.9	6.6
ベビーシッター	1.2	3.9	0.6	0.8	0.9	2.7	0.5	0.6
ファミリーサポートセンター	1.2	2.0	0.6	1.6	1.9	2.7	1.1	2.4
保育ママ	0.3	2.0	0.0	0.0	0.5	0.0	0.5	0.6
祖父母の家	16.4	25.5	14.1	15.6	19.9	31.1	17.1	18.0
祖父母以外の親戚の家	0.6	0.0	0.6	0.8	0.5	0.0	0.5	0.6
幼稚園・保育園が行っている 一時預かり保育	8.1	3.9	5.8	12.5	10.7	12.2	8.6	12.6
幼稚園（預かり保育を除く）	1.8	2.0	0.6	3.1	1.6	0.0	0.0	4.2
友人の家	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5	2.7	0.0	0.0
近所の家	0.3	0.0	0.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
その他	5.4	5.9	3.8	7.0	2.6	4.1	2.1	2.4

注1) 複数回答。
 注2) 定期的に子どもを預けている人のみ回答。
 注3) 16項目中、経年比較が可能な13項目のみ図示。
 注4) () 内はサンプル数。

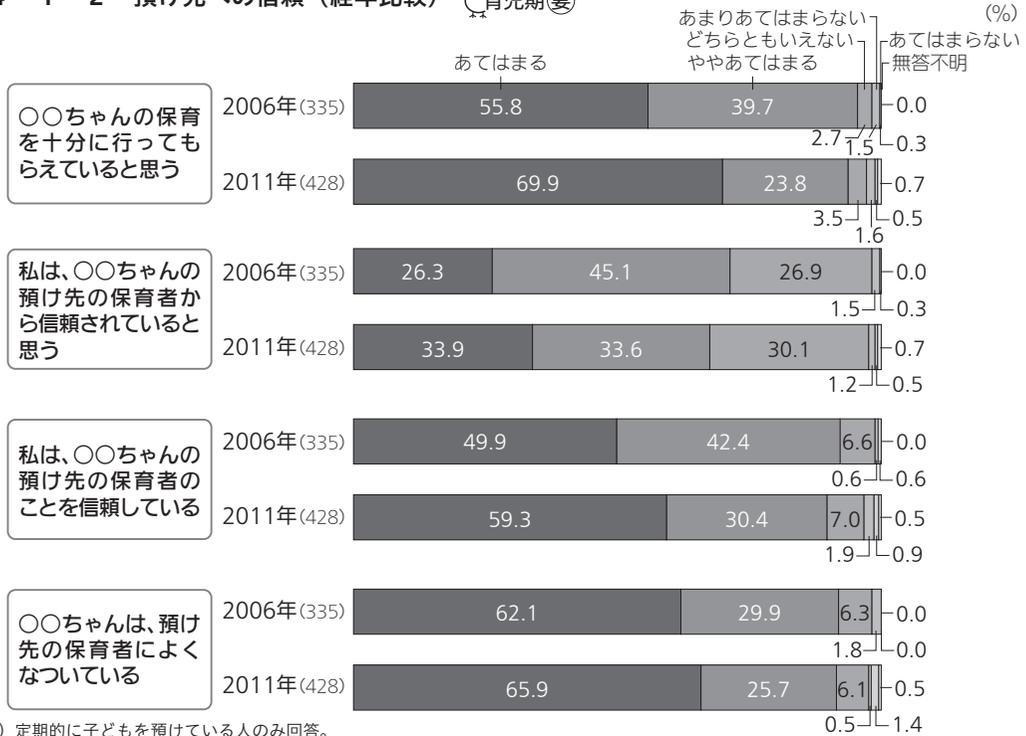
預け先への信頼と親の子育て意識

育児期の妻に預け先との関係性についてたずねた。用意した質問のうち経年比較ができるものは、子どもの保育に関して預け先を信頼している程度を評価する4項目であった。具体的には、「〇〇ちゃんの保育を十分に行ってもらえていると思う」、「私は、〇〇ちゃんの預け先の保育者から信頼されていると思う」、「私は、〇〇ちゃんの預け先の保育者のことを信頼している」、「〇〇ちゃんは、預け先の保育者によくなっている」の4項目について、「あてはまる」から「あてはまらない」の5段階で回答してもらっている。図4-1-2は、育児期の妻が、子どもをもっとも長時間預けている相手に対してどの程度信頼をおいているかを、調査年ごとに比較したもの

である。その結果、「あてはまる」の回答に注目すると、4項目すべてにおいて2006年より2011年のほうが多くなっており、とくに「〇〇ちゃんの保育を十分に行ってもらえていると思う」では14.1ポイントも上昇していた（2006年：55.8%、2011年：69.9%）。

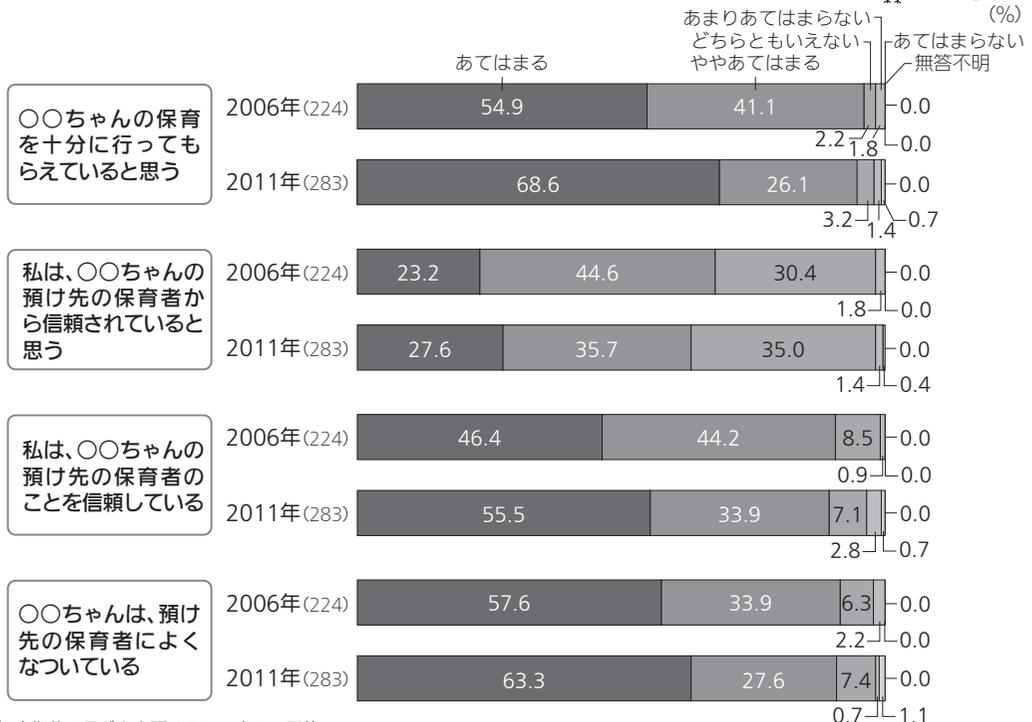
図4-1-3は、預け先として親戚や友人を選んだ妻を除き、託児施設や保育サービスにおける保育者に限定して、育児期の妻がどの程度信頼をおいているかを調査年ごとに比較したものである。その結果、図4-1-2と同様に、すべての項目で2011年のほうが「あてはまる」と回答した人が多く、なかでも「〇〇ちゃんの保育を十分に行ってもらえていると思う」では13.7ポイント上昇していた（2006年：54.9%、2011年：68.6%）。

図4-1-2 預け先への信頼（経年比較）



注1) 定期的に子どもを預けている人のみ回答。
 注2) 預け先として、表4-1-1の13項目を選択した人のみ分析。
 注3) 5項目中、4項目を图示。
 注4) () 内はサンプル数。

図4-1-3 預け先（保育施設・サービスの保育者のみ）への信頼（経年比較）



注1) 定期的に子どもを預けている人のみ回答。
 注2) 表4-1-1の13項目中、「祖父母の家」、「祖父母以外の親戚の家」、「友人の家」、「近所の家」、「その他」を選択した人、すべて無答不明の人を除いて分析。
 注3) 5項目中、4項目を图示。
 注4) () 内はサンプル数。

次に、保育施設・サービスの保育者からの信頼の程度によって、育児期妻の子育て意識がどのように異なるかを比較した。ここでの子育て意識とは、育児への肯定感と否定感のことであり、前者については「子育てに自信が持てるようになった」と「子どもを育てることに充実感を味わっている」の2項目を、後者に関しては「子どもがうまく育っているか不安になる」と「子育てのためにいつでも時間に追われていて苦しい」の2項目でたずねている。

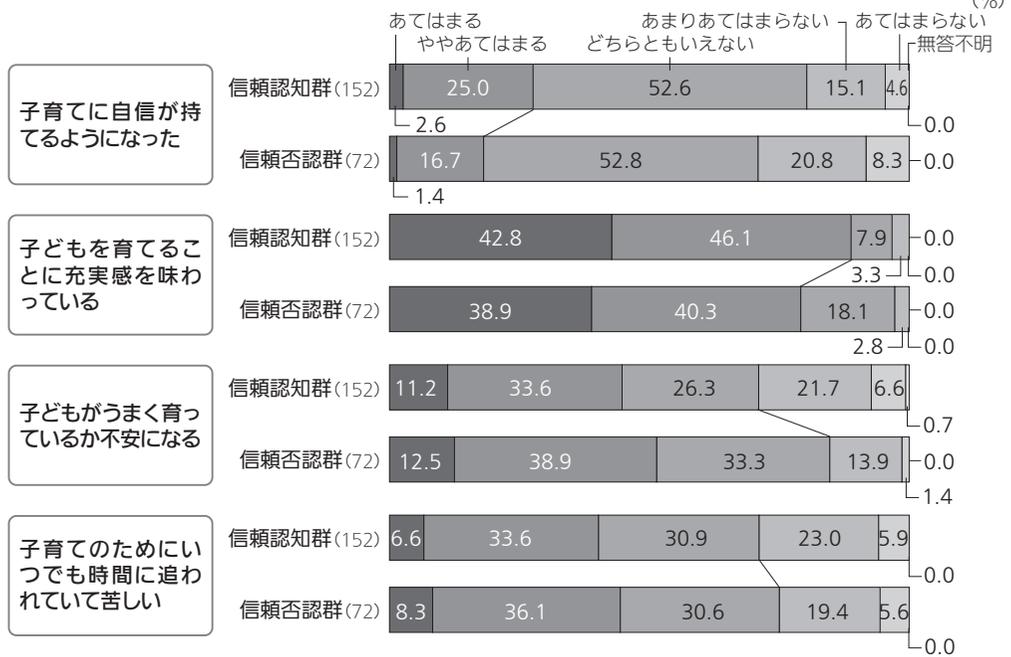
まず、その4項目それぞれについて、「あてはまる」もしくは「ややあてはまる」と回答した人を肯定群、無答不明を除くそれ以外の回答の人を否定群として分類したところ、「〇〇ちゃんの預け先の保育者から信頼されていると思う」以外の3項目については、否定群に該当する人が肯定群の該当者の10%程度と極端に少なかったため^{*1)}、子育て意識との関連については検討しない。図4-1-4(2006年)と図4-1-5(2011年)は、各調査年において、私は、「〇〇ちゃんの預け先の保育者から信頼されていると思う」という項目について「あてはまる」「ややあてはまる」と回答した人を信頼認知群、「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」と回答した人を信頼否認群として、それぞれについて、子育て意識に関する各項目の回答分布を集計したものである。図4-1-4の結果をみると、信頼認知群のほうが信頼否認群に比べて、子育て意識の肯定的な内容の2項目で「あてはまる」や「ややあてはまる」の回答が多く、反対に否

定的な内容の2項目では「あまりあてはまらない」や「あてはまらない」という回答が多いことがわかる。とくに、「子育てに自信が持てるようになった」に関しては、信頼認知群のほうが信頼否認群に比べて、「あてはまる」や「ややあてはまる」の回答が多く(信頼認知群:27.6%、信頼否認群:18.1%)、「あまりあてはまらない」や「あてはまらない」の回答が少ない(信頼認知群:19.7%、信頼否認群:29.1%)という顕著な差がみられていた。2011年(図4-1-5)の結果も2006年とほぼ変わらず、「子育てに自信が持てるようになった」の項目では、信頼認知群が信頼否認群に比べて「あてはまる」や「ややあてはまる」の回答が多く(信頼認知群:39.1%、信頼否認群:22.1%)、「あまりあてはまらない」や「あてはまらない」の回答が少ない(信頼認知群:16.8%、信頼否認群:34.6%)という顕著な差がみられた。さらに、2011年では「子どもがうまく育っているか不安になる」という否定感の項目に関して、信頼認知群のほうが信頼否認群よりも「あてはまる」や「ややあてはまる」の回答が少なく(信頼認知群:41.9%、信頼否認群:54.9%)、「あまりあてはまらない」や「あてはまらない」の回答が多い(信頼認知群:31.9%、信頼否認群:17.3%)という顕著な差がみられた。

このように、子どもを預ける施設・サービスの保育者から信頼されていると思えることが、親の子育て意識を健全に保つことにかかわる要因の1つとなっているようである。

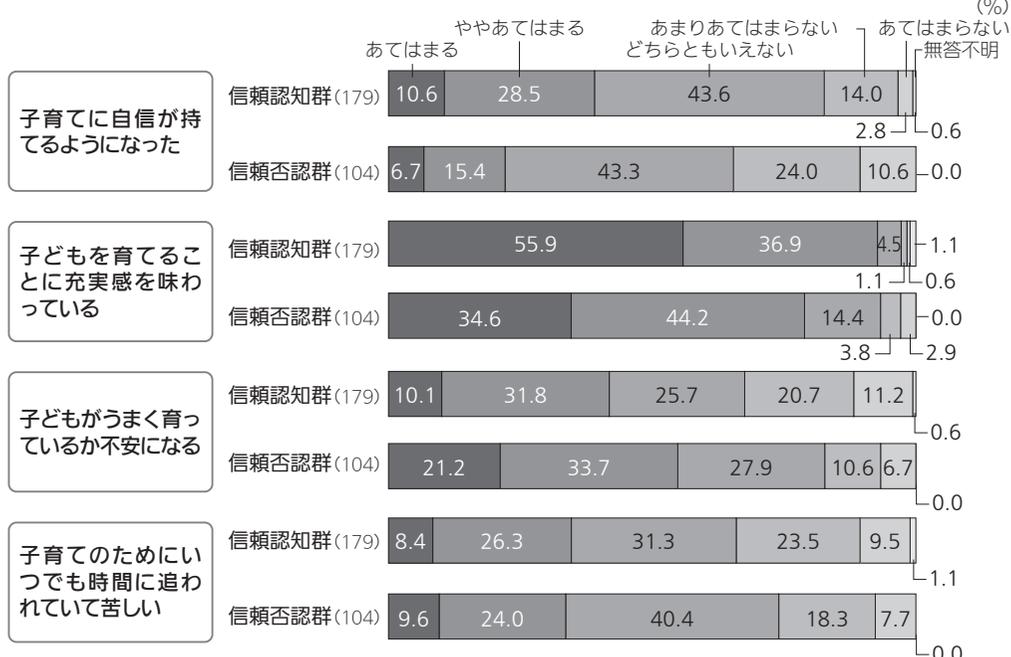
*1) 各項目での肯定群(「あてはまる」「ややあてはまる」)と否定群(「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」)に該当した人数の比率は、「〇〇ちゃんの保育を十分に行ってもらえていると思う」では2006年の肯定群215名に対して否定群が9名、2011年の肯定群268名に対して否定群が15名、「私は、〇〇ちゃんの預け先の保育者のことを信頼している」では2006年の肯定群203名に対して否定群が21名、2011年の肯定群253名に対して否定群が30名、「〇〇ちゃんは、預け先の保育者によくなっている」では2006年の肯定群205名に対して否定群が19名、2011年の肯定群257名に対して否定群が26名であった。

図4-1-4 子育て意識（2006年 保育施設・サービスの保育者からの信頼認知別）育児期妻



注1) 表4-1-1の13項目中、「祖父母の家」、「祖父母以外の親戚の家」、「友人の家」、「近所の家」、「その他」を選択した人、すべて無答不明の人を除いて分析。
 注2) 「私は、〇〇ちゃんの預け先の保育者から信頼されていると思う」に「あてはまる」「ややあてはまる」と回答した人を「信頼認知群」、「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」と回答した人を「信頼否認群」とした。
 注3) 8項目中、4項目を図示。
 注4) ()内はサンプル数。

図4-1-5 子育て意識（2011年 保育施設・サービスの保育者からの信頼認知別）育児期妻



注1) 表4-1-1の13項目中、「祖父母の家」、「祖父母以外の親戚の家」、「友人の家」、「近所の家」、「その他」を選択した人、すべて無答不明の人を除いて分析。
 注2) 「私は、〇〇ちゃんの預け先の保育者から信頼されていると思う」に「あてはまる」「ややあてはまる」と回答した人を「信頼認知群」、「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」と回答した人を「信頼否認群」とした。
 注3) 8項目中、4項目を図示。
 注4) ()内はサンプル数。

地域での子どもを通じたつきあい

地域での子どもを通じたつきあいは妻・夫ともに減少しており、その傾向は0歳児の子どもを持つ親、また年齢の低い母親で顕著である。とくに母親は、地域で子どもを通じたつきあいがあることが子育て意識を健全に保つことにつながるため、親の孤立を防ぐために、地域内の関係性を築いておくことが望まれる。

地域での子どもを通じたつきあいの経年比較

育児期の夫婦を対象に、居住している地域に子どもを通じてつきあう人がどれだけいるかをたずねた。図4-2-1と図4-2-2は、妻と夫それぞれが「○○ちゃんを預けられる人」、「○○ちゃんのことを気にかけて、声をかけてくれる人」、「子育ての悩みを相談できる人」、「子ども同士を遊ばせながら、立ち話をする程度の人」の各質問について、「1人もいない」から「3人以上いる」までの4段階で評価した回答を調査年ごとに集計したものである。

はじめに、妻の結果（図4-2-1）で「1人もいない」に注目してみると、すべての項目において2011年のほうが2006年よりも回答比率が多くなっている。なかでも、「○○ちゃんのことを気にかけて、声をかけてく

れる人（2006年：15.5%、2011年：21.9%）」と「子ども同士を遊ばせながら、立ち話をする程度の人（2006年：25.6%、2011年：34.3%）」での変化は5ポイント以上増加している。また、夫の結果（図4-2-2）に関しても同様の傾向がみられ、「1人もいない」に注目してみた場合に、すべての項目で2011年のほうが2006年よりも回答比率が多くなっていた。夫に関しても「○○ちゃんのことを気にかけて、声をかけてくれる人」での変化は他の項目に比べて大きく、2006年では24.8%であったのが2011年では33.6%と8.8ポイント増加していた。このように、妻と夫のどちらにたずねた場合にも、2006年に比べて2011年のほうが、地域での子どもを通じたつきあいがないと答えている人が多いことがわかる。

図4-2-1 近所づきあい（経年比較）

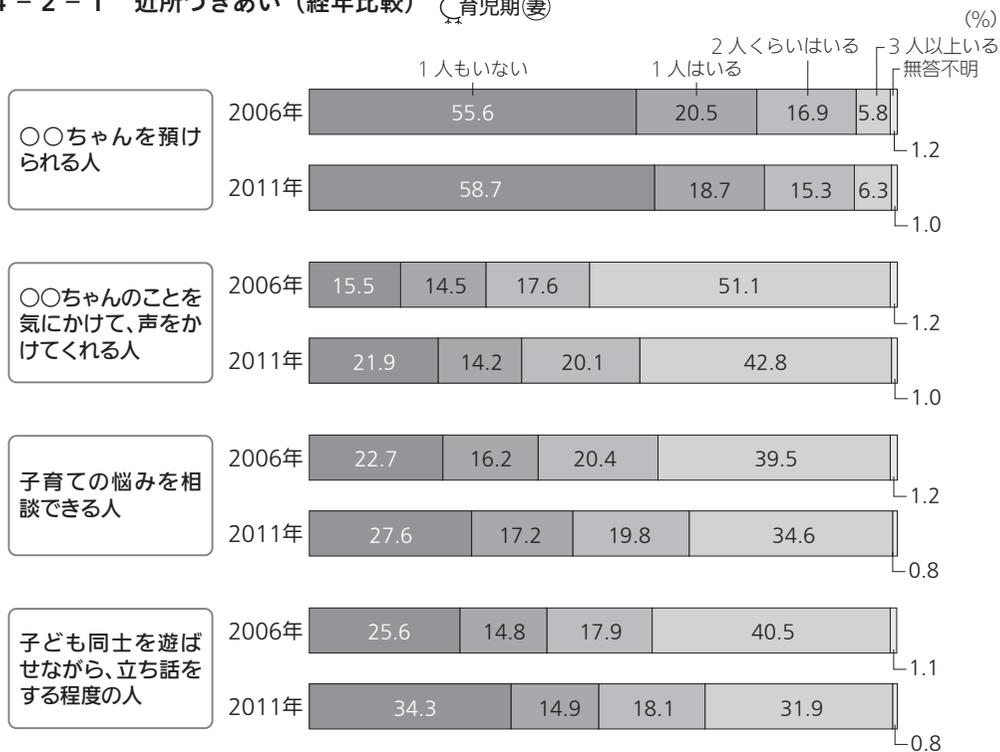
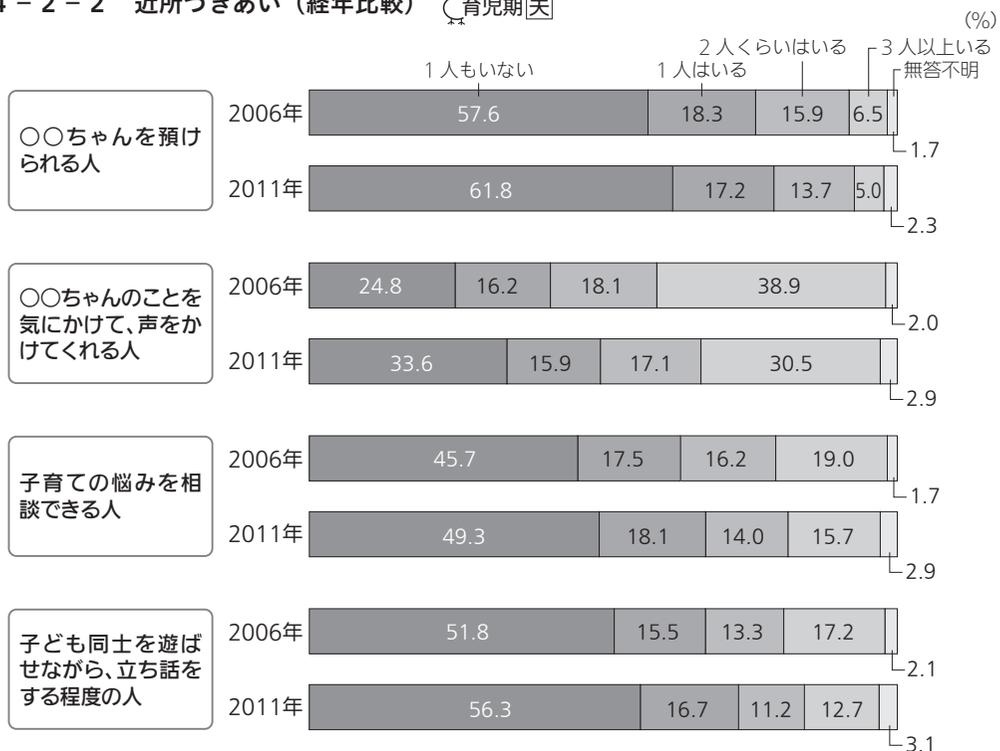


図4-2-2 近所づきあい（経年比較）

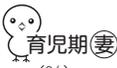


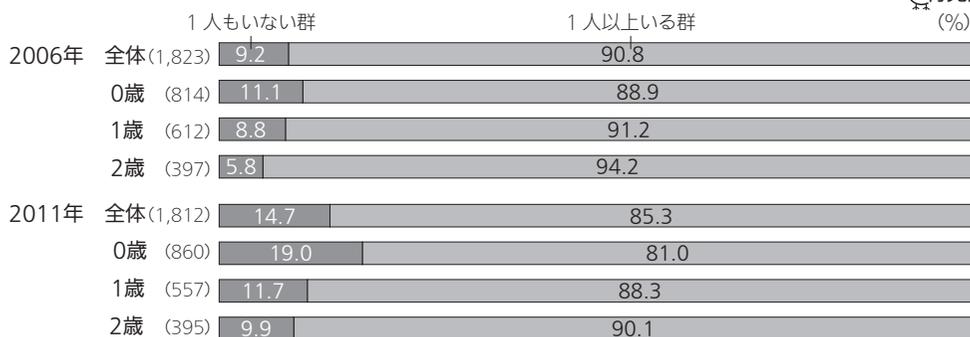
次に、育児期の妻と夫を、地域での子どもを通じたつきあいに関する4項目すべてで「1人もいない」と回答した人と、4項目のいずれかで少なくとも「1人はいる」と回答した人に分類した。これ以降は、前者を「1人もいない群」、後者を「1人以上いる群」と呼ぶ。図4-2-3と図4-2-4は、妻と夫それぞれについて、子どもの年齢ごとに2つの群の比率を示したものである。

はじめに、妻に関する全体集計をみると、1人もいない群の割合は2006年の9.2%から2011年の14.7%に増加していることがわかる。夫に関する全体集計でも同様に、2006年の21.6%から2011年には27.3%へと増加している。子どもの年齢ごとの集計では、妻と夫に共通する結果として、0歳の子どもがいる親での差が比較的大きく、2006年から2011年にかけて妻では約8ポイント増加(11.1%から19.0%)し、夫では9ポイント増加(25.0%から34.0%)していた。このことから、子どもを通じた地域のつきあいは5年間で少なくなっており、なかでも0歳の子どもがいる親にその傾向が顕著であるといえ

よう。

図4-2-5と図4-2-6は、親の年齢ごとに地域でのつきあいの有無を2006年と2011年でみたものである。各年における1人もいない群の比率を比較してみると、妻に関してはどの年齢段階においても2011年の値のほうが2006年に比べて大きくなっている。とくに、24歳以下の場合には、2006年の7.9%から2011年の19.2%へと11.3ポイントも増加していた。一方、夫に関しては、30代において顕著な差がみられており、「30～34歳」では2006年の21.8%から2011年の27.7%に、「35～39歳」では2006年の21.4%から2011年の28.6%へと増加している。このように、地域での子どもを通じたつきあいの有無は全体でも経年で1人もいない群の割合が増えており、親の年齢によっても異なるようである。さらに、図4-2-3の結果と合わせて考えれば、年齢の低い母親で、子どもが0歳という低年齢である場合に、子どもを通じた地域でのつきあいが少ない傾向にあることが示唆される。

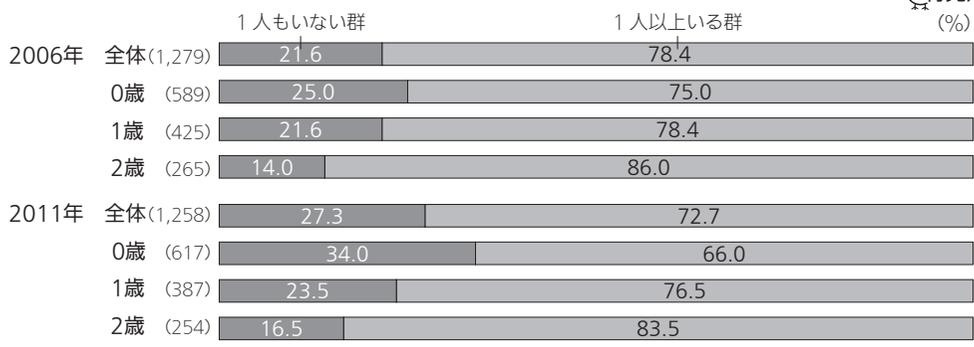
図4-2-3 地域での子どもを通じたつきあいの有無（経年比較 全体・子どもの年齢別）



注1) 「地域での子どもを通じたつきあい」の質問4項目すべてに「1人もいない」と回答した人を「1人もいない群」、1項目でも「1人はいる」「2人くらいはいる」「3人以上いる」と回答した人を「1人以上いる群」とした。1項目でも無答不明の人は除く。

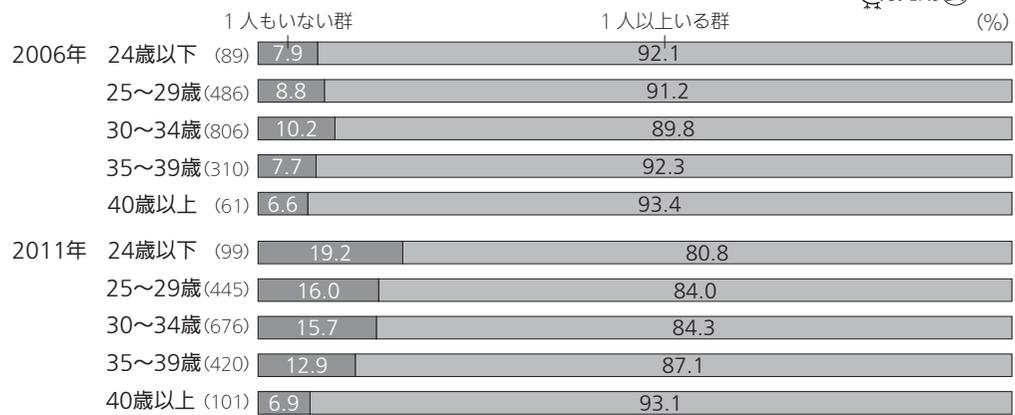
注2) ()内はサンプル数。

図4-2-4 地域での子どもを通じたつきあいの有無（経年比較 全体・子どもの年齢別）



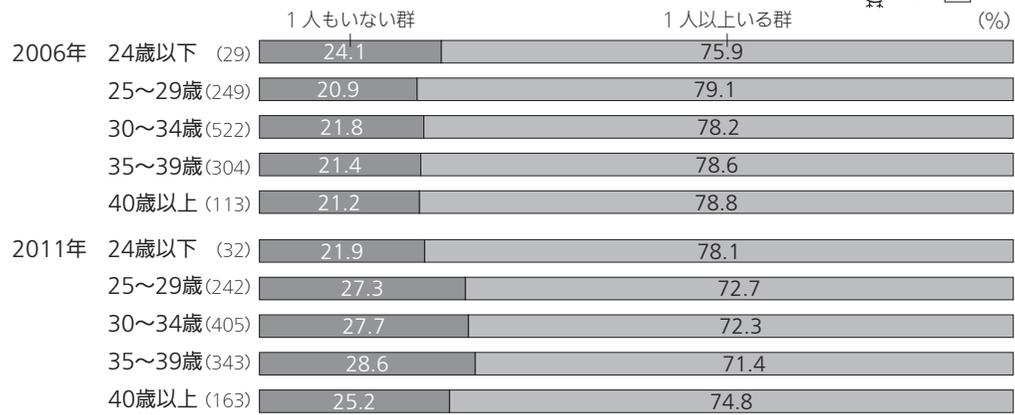
注1)「地域での子どもを通じたつきあい」の質問4項目すべてに「1人もいない」と回答した人を「1人もいない群」、1項目でも「1人はいる」「2人くらいはいる」「3人以上いる」と回答した人を「1人以上いる群」とした。1項目でも無答不明の人は除く。
注2) ()内はサンプル数。

図4-2-5 地域での子どもを通じたつきあいの有無（経年比較 年齢別）



注1)「地域での子どもを通じたつきあい」の質問4項目すべてに「1人もいない」と回答した人を「1人もいない群」、1項目でも「1人はいる」「2人くらいはいる」「3人以上いる」と回答した人を「1人以上いる群」とした。1項目でも無答不明の人は除く。
注2) ()内はサンプル数。

図4-2-6 地域での子どもを通じたつきあいの有無（経年比較 年齢別）



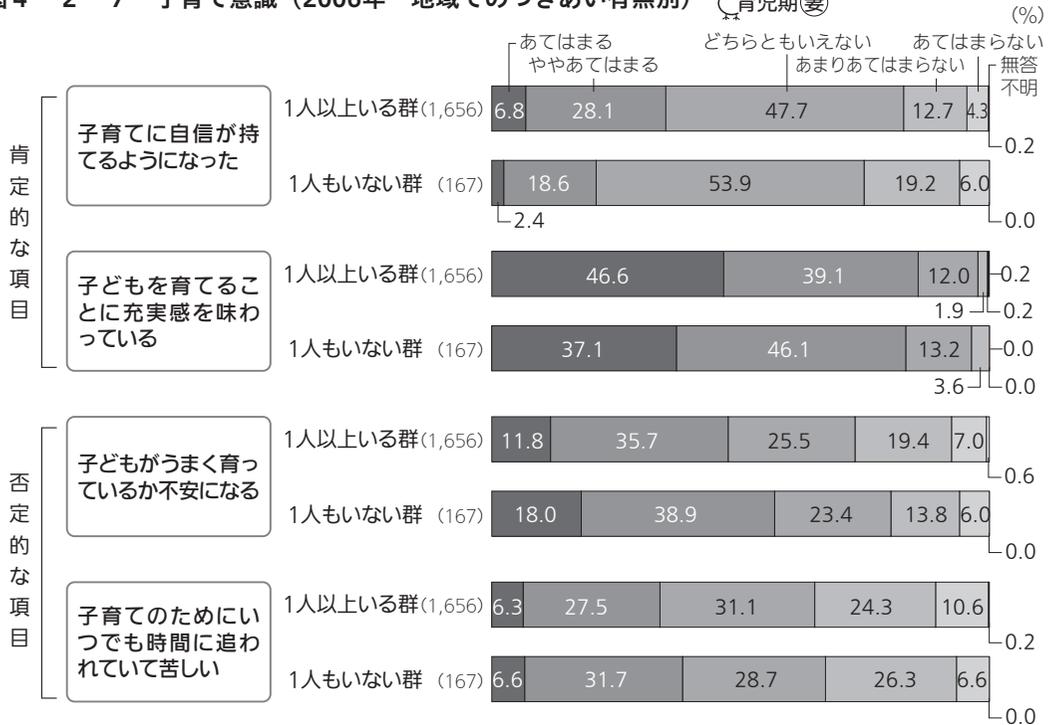
注1)「地域での子どもを通じたつきあい」の質問4項目すべてに「1人もいない」と回答した人を「1人もいない群」、1項目でも「1人はいる」「2人くらいはいる」「3人以上いる」と回答した人を「1人以上いる群」とした。1項目でも無答不明の人は除く。
注2) ()内はサンプル数。

.....
**地域での子どもを通じたつきあいの有無と
子育て意識**
.....

最後に、育児期の妻と夫それぞれに関して、1人もいない群と1人以上いる群の違いによって、子育て意識がどのように異なるかを比較した。図4-2-7(2006年)と図4-2-8(2011年)は、各調査年における妻の回答分布を集計したものである。まず、2006年の結果(図4-2-7)では、1人以上いる群のほうが1人もいない群に比べて、子育て意識の肯定的な内容の2項目で「あてはまる」や「ややあてはまる」の回答が多く、反対に否定的な内容の2項目では「あまりあてはまらない」や「あてはまらない」という回答が多かった。なかでも、「子育てに自信が持てるようになった」では、1人以上いる群のほうが1人もいない群に比べて、「あてはまる」や「ややあてはまる」の回答割合が多く(1人以上いる群:34.9%、1人もいない群:21.0%)、「あまりあてはまらない」や「あてはまらない」の回答割合が少なかった(1人以上いる群:17.0%、1人もいない群:25.2%)。また、「子どもがうまく育っているか不安になる」という否定的な内容の項目に

関しては、1人以上いる群のほうが1人もいない群よりも「あてはまる」や「ややあてはまる」の回答が少なく(1人以上いる群:47.5%、1人もいない群:56.9%)、「あまりあてはまらない」や「あてはまらない」の回答が多かった(1人以上いる群:26.4%、1人もいない群:19.8%)。2011年(図4-2-8)の結果も2006年と同様であり、とくに「子育てに自信が持てるようになった」の項目で、1人以上いる群のほうが1人もいない群に比べて、「あてはまる」や「ややあてはまる」の回答が多く(1人以上いる群:34.8%、1人もいない群:21.7%)、「あまりあてはまらない」や「あてはまらない」の回答が少なかった(1人以上いる群:18.2%、1人もいない群:31.8%)。また、「子どもがうまく育っているか不安になる」という否定感の項目でも、2006年と同様に、1人以上いる群のほうが1人もいない群よりも「あてはまる」や「ややあてはまる」の回答が少なく(1人以上いる群:46.8%、1人もいない群:55.5%)、「あまりあてはまらない」や「あてはまらない」の回答が多かった(1人以上いる群:28.0%、1人もいない群:21.4%)。

図4-2-7 子育て意識（2006年 地域でのつきあい有無別）

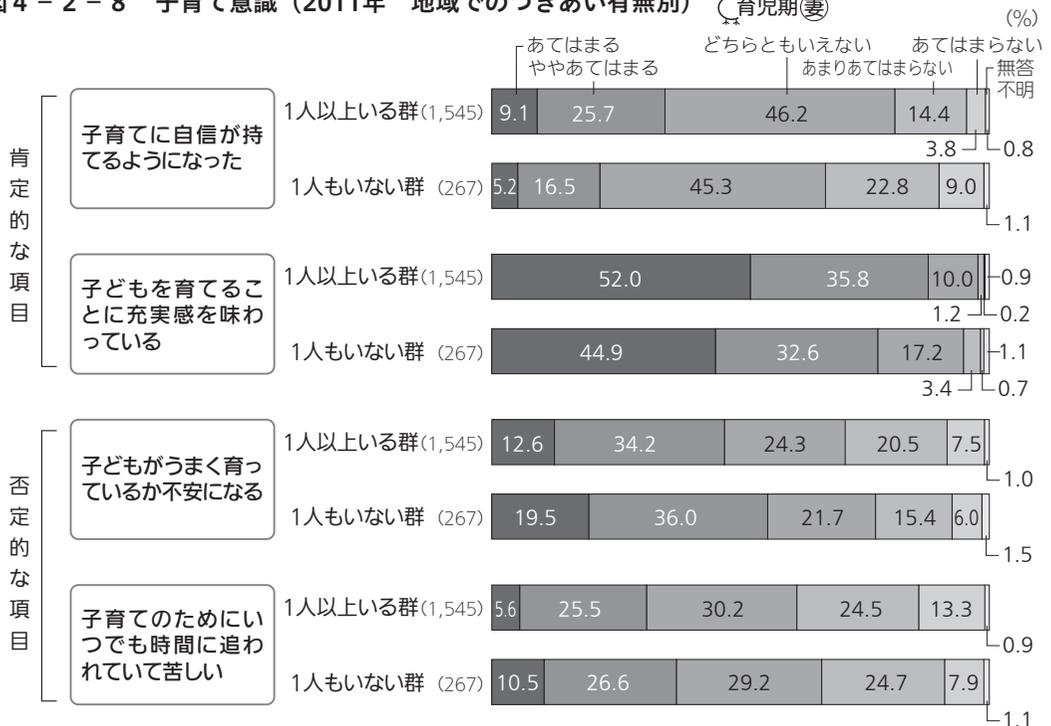


注1) 「地域での子どもを通じたつきあい」の質問4項目すべてに「1人もいない」と回答した人を「1人もいない群」、1項目でも「1人はいる」「2人くらいはいる」「3人以上いる」と回答した人を「1人以上いる群」とした。1項目でも無答不明の人は除く。

注2) 8項目中、4項目を図示。

注3) ()内はサンプル数。

図4-2-8 子育て意識（2011年 地域でのつきあい有無別）



注1) 「地域での子どもを通じたつきあい」の質問4項目すべてに「1人もいない」と回答した人を「1人もいない群」、1項目でも「1人はいる」「2人くらいはいる」「3人以上いる」と回答した人を「1人以上いる群」とした。1項目でも無答不明の人は除く。

注2) 8項目中、4項目を図示。

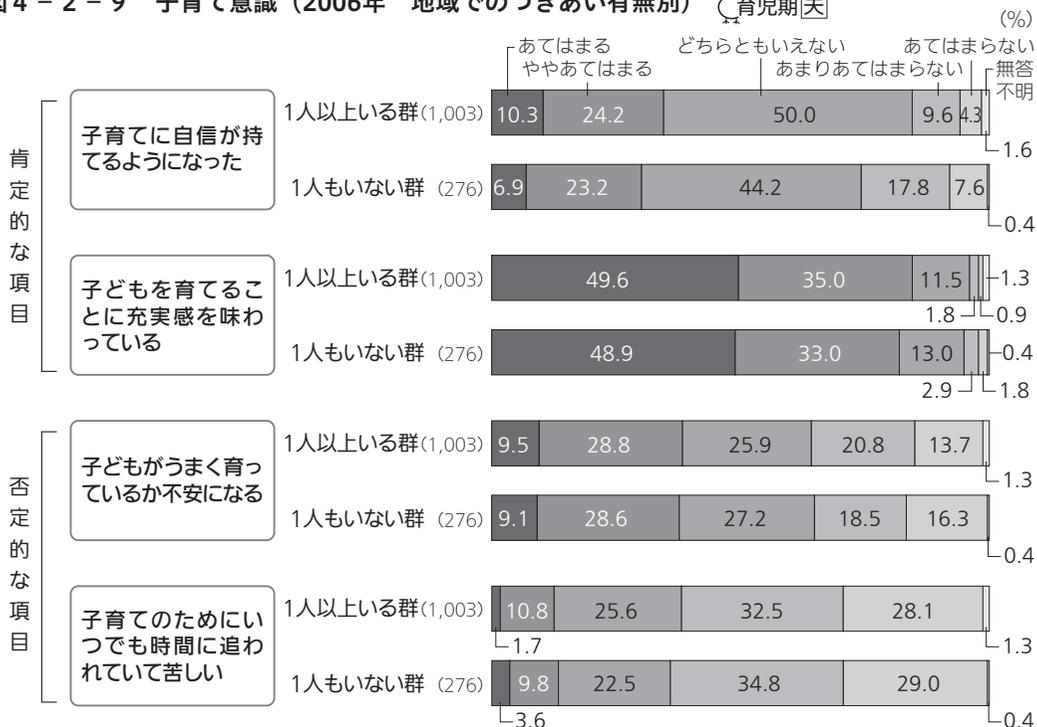
注3) ()内はサンプル数。

図4-2-9と図4-2-10は、2006年と2011年調査における夫の地域での子どもを通じたつきあいの有無と子育て意識についてそれぞれまとめたものである。妻の結果と比較してみると、夫の場合は1人以上いる群と1人もいない群での子育て意識の差が明確ではない。しかし、「子育てに自信が持てるようになった」の項目では、2006年と2011年に共通して、2つの群の間に比較的差がみられている。2006年では、1人以上いる群のほうが1人もいない群に比べて、「あてはまる」や「ややあてはまる」の回答が多く（1人以上いる群：34.5%、1人もいない群：30.1%）、「あまりあてはまらない」や「あてはまらない」の回答が少ない（1人以上いる

群：13.9%、1人もいない群：25.4%）。2011年では、1人以上いる群のほうが1人もいない群に比べて、「あてはまる」や「ややあてはまる」の回答が多く（1人以上いる群：37.4%、1人もいない群：30.9%）、「あまりあてはまらない」や「あてはまらない」の回答がやや少なくなっていた（1人以上いる群：16.0%、1人もいない群：18.9%）。

以上から、とくに育児期の妻にとって、地域で子どもを通じたつきあいのあることが、子育て意識を健全に保つことにかかわる要因の1つとなっているようである。また、妻ばかりでなく夫に関しても、地域での子どもを通じたつきあいが子育てへの自信につながる可能性が示唆される。

図4-2-9 子育て意識（2006年 地域でのつきあい有無別）

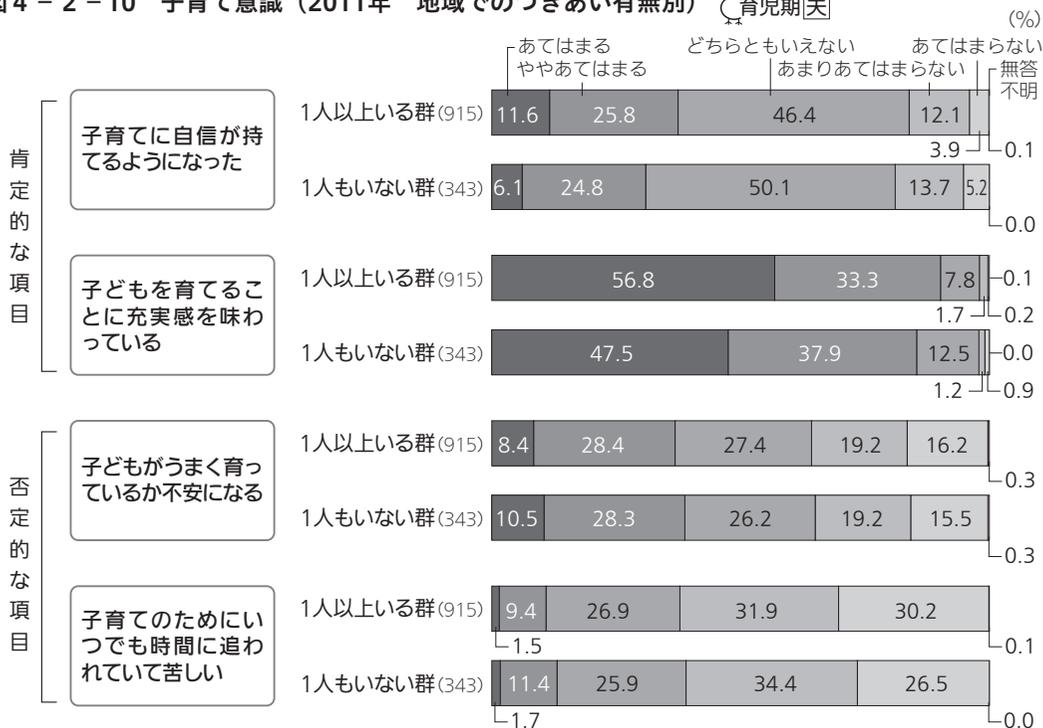


注1) 「地域での子どもを通じたつきあい」の質問4項目すべてに「1人もない」と回答した人を「1人もない群」、1項目でも「1人はいる」「2人くらいはいる」「3人以上いる」と回答した人を「1人以上いる群」とした。1項目でも無答不明の人は除く。

注2) 8項目中、4項目を図示。

注3) () 内はサンプル数。

図4-2-10 子育て意識（2011年 地域でのつきあい有無別）



注1) 「地域での子どもを通じたつきあい」の質問4項目すべてに「1人もない」と回答した人を「1人もない群」、1項目でも「1人はいる」「2人くらいはいる」「3人以上いる」と回答した人を「1人以上いる群」とした。1項目でも無答不明の人は除く。

注2) 8項目中、4項目を図示。

注3) () 内はサンプル数。

本章のまとめと考察

以上に報告してきたように、2006年から2011年にかけて、0～2歳の子どもの託児率が増加し、施設・サービスの保育者との信頼関係の評価も高くなっていることから、保育と養育の相補的な関係性が形づくられてきている印象を受ける。その一方で、地域での子どもを通じたつきあいには減少傾向がみられ、なかでも母親が若く24歳以下の場合や0歳の子どもがいる場合に顕著であった。また、託児先から信頼されていると感じられることや、地域での子どもを通じたつきあいのあることが、子育てへの自信につながる事が示唆されていた。

今回の調査は、はじめて子どもを持つ親を

対象としており、充実感とともに、ときに不安を感じながら日々の育児を経験していることが予想される。子どもを通じて出会う託児先の保育者や地域の人々からの声かけや気遣いは、育児中の親にとって励みとなり、子育てへの前向きな気持ちや自信につながっていくのかもしれない。ライフスタイルの多様化により、親が子育てに対して求めるサポートの形態も個人によって異なっている。しかし、親が社会から孤立した状況で不安を抱えながら子育てをしていることが、子どもの発達にとってリスクとなることに違いはない。親の孤立を防ぐために、地域が育児中の親を温かく見守り、必要なときに手を差し伸べられるような関係性を築いておくことが必要と思われる。